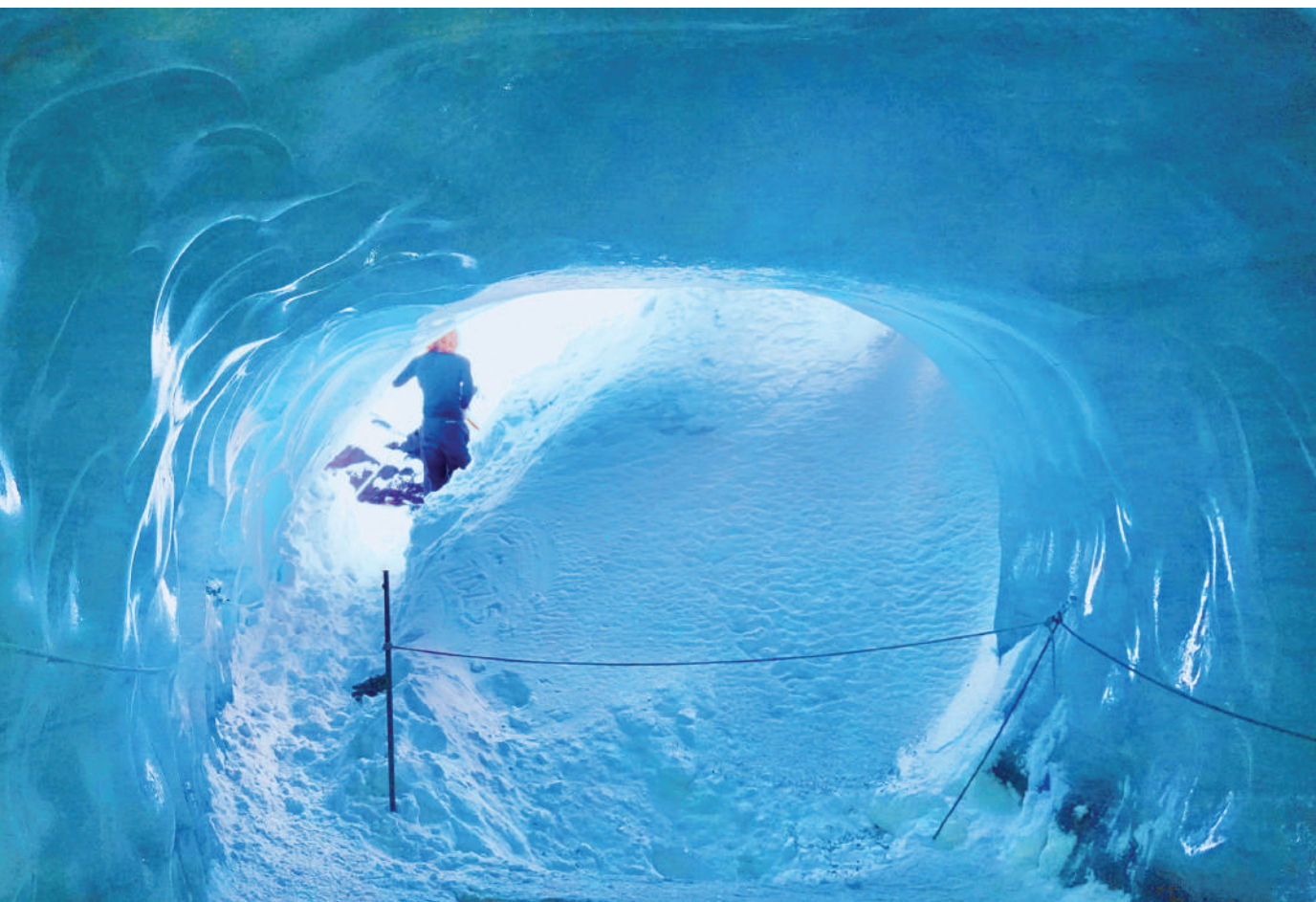


善隣

No.566 通巻833

2025年（令和7年）12月1日発行（毎月1日発行）

2025 12



一般社団法人 国際善隣協会

善 隣

目 次

2025年12月号

公開講演会記録

パレスチナ問題と中東危機川上泰徳 2

人生100年時代における医療ニーズとシーズ

——ベンチからベッドサイドへの橋渡し研究澁谷 彰 11

大平正芳をキリスト教に導いた

クリスチャン科学者、佐藤定吉山口直樹 20

陶陶俳壇馬場由紀子 29

中国ウォッチング編・訳 上松玲子 30

協会通信 32

2025年12月の行事予定 33

みんなの写真館

ミールダルスヨークトル氷河（姜晋如）表紙／32

18年前のチベット（塚原美津子）表4／32

—— 善 隣 第566号 通巻833号 ——

2025（令和7）年12月1日発行

発行所 〒105-0004 東京都港区新橋1-5-5
一般社団法人 国際善隣協会

TEL 03（3573）3051
FAX 03（3573）1783

発行人 井出亜夫

編集人 朝浩之

編集協力 山谷悦子、古田紀子

印刷所 (有)ゆにおんプレス
TEL 048-834-1201

定価 一部400円 年額4,800円

振替 00120-0-145956

国際標準逐次刊行物 ISSN 0386-0345

©禁無断転載

当協会は、中国ならびに近隣諸国
との相互理解を深め、友好親善・交
流を推進しています。

一般社団法人 国際善隣協会

公開講演会記録

パレスチナ問題と中東危機

中東ジャーナリスト 川上泰徳



本日は、パレスチナ問題と中東危機の関連についてお話しします。

パレスチナ問題は、まさに現在、ガザで続いているイスラエルによるガザ攻撃です。2023年10月7日に、ガザに拠点を置くイスラム組織ハマスが、イスラエルが建設した分離壁を越えて、イスラエル側に越境攻撃し、約1200人の死者が出て、約250人がガザに拉致されて人質になり、それに対するイスラエルの報復攻撃が始まり、これまでにガザでは約5万人を超える死者が出て、そのうち子どもの死者が約1万8000人で、死者の大半が民間人という無差別攻撃になっています。

このパレスチナ紛争の悪化が、中東危機につながるのかどうかについて私が考えていることをお話しします。

中東危機というのは、パレスチナ紛争だけでなく、日本が原油の9割以上を依存しているペルシャ湾岸の産油国を含む中東全域に広がる危機のことです。私は中東危機の始まりを1979年のイラン革命と、その後の80年に始まったイラン・イラク戦争と考えています。その前にも中東では1948年の第1次中東戦争（イスラエル独立戦争）に始まり、1973年の第4次中東戦争まで続いた戦争があります。1979年のエジプトとイスラエルの平

和条約の後、アラブ諸国がまとまってイスラエルと戦火を交えることはなくなりしましたが、その代わりに中東で繰り返されることになった危機のことを、私は「中東危機」と呼んでいます。

このような過去の中東危機を俯瞰しますと、1980年前後、90年前後、2001年、11年と、ほぼ10年おきに中東で大きな危機が繰り返されていることがわかります。「10年おき」になっているのは偶然というしかありません。上の中東危機を見ますと、イラン革命や「アラブの春」のような大衆動員を伴う体制転覆という「民衆が関わる革命」という形態があります。さらに、湾

岸戦争やシリア内戦など「国が関わる戦争」という形態もあり、9・11米同時多発テロや「イスラム国」(IS)の出現という「過激派組織のテロ」という形態もあることがわかります。

中東危機は、大きく分けて、革命、戦争、テロという三つの形態が、互いに絡まる形で出現しているということです。例えば、1980年前後の中東危機では、革命：イラン革命、戦争：イラン・イラク戦争、テロ：サダト暗殺という先の三つの要素が出ています。さらに、2011年の中東危機は、革命：「アラブの春」という民衆の革命、戦争：シリア内戦、テロ：「イスラム国」(IS)の出現という三つの要素が出現しています。

このような中東危機は、革命、戦争、テロという三つの異なる形態をとっていても、それが出てくる根っこや基盤は同じではないかと考えます。中東には政治や社会の矛盾が、マグマのようにたまっていて、そのときどきの中東の状況と、誰が危機を担うかによって、どの形による危機の噴出になるかが変

わってくるということになります。

1979年のイラン革命、80年のイラン・イラク戦争という中東危機の次はイラクがクウェートに侵攻して始まった1990年の湾岸危機、湾岸戦争です。その後2001年の9・11米同時多発テロ。これは米国で起きたことですけれども、アルカイダという組織が関わっており、中東の矛盾が米国で噴出したということです。その後、2003年のイラク戦争。次の、2011年の「アラブの春」はチュニジアから始まり、ベンアリ政権が倒れ、エジプトに飛び火してムバラク政権も倒れ、リビアのカダフィ政権も倒れるという、強権体制が次々と倒れる事態となりました。さらに、2014年にはイスラム国という、アルカイダから出てきた組織がイラクとシリアにまたがる国を作るというふうな、これも世界的な大事件になりました。

これが中東危機の一連の流れです。中東危機が、パレスチナ紛争とどのように関わっているかが、私が考察しようとしている問題です。中東危機を記し

た年表1に、パレスチナの出来事を加え年表2とします。

年表1で示した中東危機(■)の13年前に、パレスチナ危機(▼)が起きています。第1次インティファダ(民衆蜂起)や第2次インティファダというパレスチナ人が単独でイスラ

年表1

■1979年	イラン革命、サウジアラビアのメッカ占領事件、ソ連のアフガン侵攻(～89年)、イラン・イラク戦争(～88年)、81年サダト大統領暗殺
■1990年	イラクのクウェート侵攻(湾岸危機)、91年湾岸戦争
■2001年	9・11米同時多発テロ、03年イラク戦争
■2011年	「アラブの春」、シリア内戦、14年イスラム国(IS)樹立(～17年)

年表2

▼1977年11月	サダトのエルサレム電撃訪問、79年エジプト・イスラエル平和条約締結
■1979年	イラン革命、80年イラン・イラク戦争(～88年)、81年サダト大統領暗殺
▼1987/12/1	第1次インティファダ開始、ハマスの創設
■1990年	イラクのクウェート侵攻(湾岸危機)、91年湾岸戦争 *サダム・フセイン大統領のパレスチナ・リンケージ論
▼2000/9/1	第2次インティファダ開始
■2001年	9・11米同時多発テロ、03年イラク戦争
▼2008年12月 ～09年1月	イスラエルによる最初のカサ攻撃、約1,400人の死者
■2011年	「アラブの春」、シリア内戦、14年イスラム国(IS)樹立(～17年)

エルの占領に対応する動きがあり、さらに2011年の「アラブの春」の2年前に、イスラエル軍による最初のガザ攻撃がありました。

中東危機とパレスチナ危機の関係でいいますと、1979年のイラン革命の前に何があったかという、1977年にエジプトのサダト大統領のエルサレム電撃訪問があり、それが79年のエジプト・イスラエル平和条約につながるわけです。エジプトは1948年の第1次中東戦争以来、イスラエルとアラブ諸国の戦争を主導してきた国ですから、そのエジプトが単独でイスラエルと平和条約を結んだことで、中東戦争の時代は終わりました。

1990年のイラクのクウェート侵攻の2年前、1987年ですが、パレスチナで第1次インティファダが起きました。民衆による反占領デモが中心で、パレスチナ人の少年がイスラエル軍戦車の前に立って石を投げるというイメージが世界に広がりました。クウェートに進行したイラクの指導者はサダム・フセイン大統領でしたが、

国連安保理にクウェートからの撤退を求められて、彼はイスラエルがパレスチナから撤退するなら自分たちもクウェートから撤退すると「パレスチナ・リンケージ」を持ち出しました。それはアラブ民衆の支持を得ようとする苦し紛れの言い分ではあるとしても、第1次インティファダが国境を越えてアラブ民衆に影響を与えていたことは無視できないと思います。実際にフセインはパレスチナ人の英雄になり、多くのアラブ人が喝采を挙げたわけですから、03年のイラク戦争という中東危機の前に第2次インティファダがありました。これは第1次のインティファダと異なり、パレスチナ側の武装闘争が中心でした。9・11テロの翌2002年11月に、アルカイダを率いるビンラディンは「アメリカ人への手紙」と呼ばれる文書を発表し、米国への攻撃を正当化する第一の理由として、「ユダヤ人は米国の支援と支持によってこの50年間にわたってパレスチナを占領し、専制と犯罪と殺戮と追放と、破壊

と荒廃をもたらしている」とパレスチナ問題を挙げました。この理屈も後付けかもしれませんが、第2次インティファダでパレスチナ人がイスラエルの占領に立ち上がり、イスラエル軍と対峙していることを挙げて、自分たちの対米攻撃にアラブ民衆の支持を得ようとしたということです。

2011年の「アラブの春」の前にイスラエル軍による最初のガザ攻撃がありました。イスラエルは封鎖しているガザに大規模な空爆を行いました、ガザの南側の境界はエジプトですが、エジプトが境界を封鎖し続けていることで、エジプトはイスラエルの攻撃に加担しているという批判がエジプトだけでなく、アラブ世界で起こりました。エジプトのカイロでは、若者たちが占拠し、「アラブの春」の舞台となったタハリール広場の一角に、ガザ救援のテントが建ち、イスラエルによるガザ攻撃下での惨状を伝える写真が並んでいました。このような写真はムバラク政権下ではメディアには出ていませんでした。ときにタハリール広場で集

まっている若者たちのリーダーの一人に話を聞きました。彼は「ガザ攻撃のときは地下のトンネルに潜って、ガザに物資を届けたり、一緒に戦ったりした」と話してくれました。エジプトに戻って軍に拘束され、刑務所に送られ、「アラブの春」で刑務所が若者たちによって解放されたときに出てきました。

アラブ世界には「アラブの大義」という言葉があります。それはパレスチナ解放と同義でした。アラブ世界にとって、1948年のイスラエルの建国は、ヨーロッパの侵略と捉えられています。特に、エルサレムはイスラムにとってメッカ、メディナに次ぐ第三の聖地でもあるわけです。「パレスチナの解放」が「アラブの大義」の重要な柱です。かつては「アラブの英雄」と言われたナセル大統領がいてイスラエルと対峙していたエジプトは、イスラエルと平和条約を結び、それ以降、アラブ諸国とイスラエルの戦争はなくなりしました。それに代わって、パレスチナ人はアラブの支援もなく、イスラエルに対して立ち上がることになりました。

もともと「アラブの大義」としてやっていたのに、今パレスチナ人だけが、それも圧倒的に強者のイスラエルを相手に蜂起しているという構図が繰り返される。パレスチナ人が立ち上がり、イスラエルに圧倒的な力で打ち碎かれる。アラブ世界に見捨てられ、孤立するパレスチナという構図です。パレスチナ人と言うのは「パレスチナ地域」に住むアラブ人ということで、母語はアラビア語です。つまり、北アフリカからイラク・シリアなどの中東東部、アラビア半島まで、20か国のアラブ諸国に住むアラブ人の「同胞」であるわけです。

「アラブの大義」は、アラブ諸国の為政者にとっては統治の正当性を担保し、アラブ・ナショナリズムの根拠でしたから、イスラエルとは軍事的に対峙しなくなったアラブ諸国が、パレスチナ人を見捨てているという状況が生まれるわけです。パレスチナ危機が起こると、アラブ諸国、特に親米アラブ諸国は、米国やイスラエルに対して、何ら抗議する立場をとろうとしないことから、アラブの民衆からは「指導者は何をやっ

てるんだ。どうして助けないんだ」という思いが高まってくる。私が「アラブの春」のときに感じた反体制の若者たちの思いはまさにそれでした。

「アラブの春」のとき、私はずっと若者たちが集まっていたカイロのタハリール広場で取材をしていたのですが、若者たちは「名誉（カーマ）の革命だ」と言いました。19日間のデモで、30年間強権で統治してきたムバラク大統領が辞任を発表すると、そのニュースが広がり、タハリール広場では何万単位で若者たちから大きな、いろんな声が上がりました。「自由」とか、「神は偉大なり」とか。その中で、「イルファア・ラサク・フォーク・インタ・マスリー」（あなたの頭を上になげなさい。あなたはエジプト人だ）という声が上がリ、それが広場で合唱となり、広がっていきました。その言葉は、1950年代、60年代にアラブ民族主義を掲げたナセル大統領の言葉だったのです。

ナセルは1952年のエジプト革命で自由将校団という青年将校グループ

を率いて王政を打倒し、共和制を樹立しました。56年に大統領に就任し、アラブ民族主義を掲げて欧米帝国主義との戦いを打ち出し、英仏が権益を有するスエズ運河の国有化宣言や、パレスチナ解放を「アラブの大義」としてイスラエルと対抗し、「アラブの英雄」と称されました。

私は学生時代にアラブ民族主義とナセルに関心を持ち、1979年にカイロ大学に1年留学して、ナセル関係の著作や資料を集めたことがありました。「頭を上げよ、あなたはエジプト人だ」という言葉が、民衆の心を捉えたナセルの言葉であることは知っていました。ナセルの言葉は、「頭を上げよ、あなたはエジプト人だ。隷従の時代は終わった」というもので、帝国主義と戦うアラブ民族主義を標榜していました。そのナセルの言葉が、30年を隔ててナセルにつながる軍出身のムバラク大統領を辞任に追い込んだ若者たちから勝利の言葉として発せられたのです。タハリール広場で、その言葉を聞いたとき、ほとんど二世代分にあたる59年

間を隔てる1952年のエジプト革命と、2011年のエジプト革命を貫くものは何かと考えました。二つの革命は、ナセルの言葉に込められた、失われた尊厳を回復しようとする意思によってつながっていました。

この場合の「尊厳」は、アラビア語で「カラーマ」という言葉であり、「人間としての尊厳や名誉」というニュアンスです。「カラーマ」は、ナセルの1952年革命が唱えた「アラブ民族の尊厳・名誉の回復」を意味するキーワードでした。ナセルの革命から60年を経て、ナセルの言葉がよみがえったところに、アラブ人として失われた尊厳を回復しようとする「アラブの春」の重要な側面があります。「尊厳の回復」は「アラブの春」だけでなく、アラブ世界とアラブ世界を中心とする中東で、危機が繰り返されるメカニズムを解き明かす重要なキーワードといえるでしょう。

つまり、「アラブの春」が「尊厳の革命」と呼ばれるのは、「自分たちの尊厳を取り戻す、誇りを取り戻す」という意味で、それはイスラエルの抑圧下に

あるパレスチナ人を見捨てたアラブの指導者たちに対する若者たちの思いなのです。パレスチナの危機になるたびに、アラブ諸国の政権の統治の正当性が揺らぐというのは、アラブ民衆、特に若者たちが、パレスチナ民衆を見捨てているアラブの為政者たちの行動に慚愧の念を抱くことからくるのです。

それは「アラブの春」のような民衆のデモや革命として現れるだけでなく、アラブ世界の既存の秩序に挑戦しようとするサダム・フセインのような政治指導者が戦争を始めるような形もありまし、対米聖戦（ジハード）を掲げるアルカイダが9・11米同時多発テロを行ったりする形にもなるということです。つまり、イスラエルとアラブ諸国が軍事的に対峙しなくなった中東で、パレスチナが2度にわたる「インティファダ」でパレスチナ民衆やパレスチナ武装組織がイスラエル軍に対抗することで、イスラエルの大規模な報復を受けるという非対称戦争が展開されます。それに対する「アラブの沈黙」が、中東危機を生むということです。

2011年の「アラブの春」が始まった中東危機は、シリア内戦につながりますが、アサド政権が16年にシリア第2の都市アレppoの東部を支配していた反体制勢力を制圧した後、政権軍の優勢が決定的となり、さらに米国主導の有志連合による対テロ戦争で、17年7月にイラクのISの都モスルが制圧され、10月にはシリア側のISの都ラッカが制圧されました。その結果、2011年以来荒れ続けた中東危機が収束に向かいます。

ところが、2017年12月にトランプ大統領が突然、「エルサレムはイスラエルの首都」と認定し、パレスチナ問題に火をつけました。それ以降、新たな中東危機が始まりました。

2018年はイスラエル独立によってパレスチナ人が土地を追われて70年になるので、ガザでは3月から「帰還の大行進」という反占領デモが始まりました。18年5月にテルアビブにあった米国大使館をエルサレムに移転させ、それに抗議して、ガザでは毎週若者によるデモが始まりました。

2020年3月までの2年間で、国連パレスチナ難民救済事業機関（UNRWA）の発表によると、イスラエル軍の攻撃によって46人の子どもを含む214人のパレスチナ人が殺害され、8800人近くの子どもを含む3万6100人以上が負傷しました。イスラエル兵の死亡は1人で、7人が負傷しました。パレスチナ側は武装闘争ではなく、デモをし、投石する程度ですが、イスラエル軍はゴム弾だけでなく、実弾を使用します。死者が出たのは実弾によるものです。

このような悲惨なことになっても、アラブ諸国はイスラエルや米国に対して、パレスチナ人を守るための対抗措置をとろうとはしません。それどころか、2020年夏に、アラブ首長国連邦（UAE）がイスラエルと国交正常化で合意し、その後、バーレーン、スーダン、モロッコと続きます。2021年5月に、当時のハマスのガザの政治指導者のヤヒヤ・シンワルが記者会見をし、次のように述べました。

我々は世界に二つのことを期待します。第一は、この平和的な運動を評価し、これを支持すること。第二は、我々民衆が（イスラエルへ）圧力をかけること。残念ながら、イスラエルは、民衆が行った平和的な行動に対して、いかなる対応も改善もしなかった。我々はもう一度強く主張する。我々は戦場に対して、民衆による平和的手段によって抵抗することを選ぶ。しかし、敵が罪を犯したら、我々は武装抵抗に頼らなければならない。……世界が国際法および国際決議に準拠するために、イスラエルに圧力をかける機会を使うよう求める。世界がイスラエルに、占領地から撤退するよう圧力をかけ、入植地を解体し、東エルサレムから撤退し、囚人を解放し、ガザの包囲を解き、私たちの土地にパレスチナ国家を設立することを求めるならば、地域の安定を達成することになる。長期的な停戦を行うことができる。

この記者会見はアラビア語によるものですが、いまでもアルジャジーラ・テレ

ビの映像が、ユーチューブに残っています。ハマスの指導者と言えば、闇雲にイスラエルの破壊を目指している組織というイメージかもしれませんが。ガザの政治指導者が国際社会に対して、「イスラエルの占領地からの撤退を求め、そこにパレスチナ国家を設立すること」を公式に要求していたことは、日本のメディアでは報道もされていないため、ほとんどの人は知らないわけです。

この主張は、シンワルが個人的な見解として述べたものではなく、2017年にハマスは新政策文書を発表し、その20項で、「ハマスは1967年6月4日の境界線に沿って、エルサレムを首都とする、完全に主権を持つ独立したパレスチナ国家が樹立されることを民族の総意の解決策とみなす」と明記しています。「1967年6月4日の境界線」とは、1967年第3次中東戦争で、イスラエルがヨルダン川西岸、ガザ、東エルサレムを占領する前の境界線です。

ハマスは新政策文書でもイスラエルを承認することは拒否していますが、

政治目標をイスラエルの占領地域に「パレスチナ国家樹立」としたこと、実質的にはイスラエルとの二国共存を志向したものだと解釈されています。これは創設時の1988年に作成された「ハマス憲法」で「全パレスチナ解放」つまり、イスラエルの破壊をうたっていたものの方針転換とみなされました。

現在のネタニヤフ首相などイスラエルの強硬派は「ハマスは世界を欺こうとしている」と否定しましたが、ハマスというパレスチナ人の中にファタハと二分する支持を得ている政治組織が、強硬な方針から現実的な方針に転換するのは、支持者が離れるリスクもあるわけです。政策文書に記述するだけでなく、ガザの政治指導者シンワルの記者会見で、新たな方針に基づいた発言が出てくることから、ハマスの本気度を測ることができるよう。私はこの政策文書から一つの和平の可能性は開けると考えます。

シンワルの記者会見から2年後の2023年10月、ハマスの軍事部門のカッサム軍団を率いる総司令官のムハン

マド・ディーフがハマスの越境攻撃について次のような声明を出しました。

我々の民衆を排除し、我々の聖地を破壊し、我々の民衆に対する虐殺を犯し、子どもたちや女たちや年寄りを殺し、暴行を犯している。我々はイスラエルの指導者たちに、こうした行為の停止を訴えたが、無視され、国際社会の指導者たちに、占領の罪を問うように見据えてきたが、見過ごされてきた。我々は神の助けを借りて、アルアクサー洪水作戦の始まりを宣言する。

「アルアクサー洪水作戦」というのが、ハマスの越境攻撃の作戦名で、「アルアクサー」はイスラムの聖地エルサレムにあるモスクの名前です。この声明は、2年前の政治部門のシンワルの記者会見での言葉を受けているということはおそらくです。

ハマスが越境攻撃を行ったのは、2020年のアラブ諸国によるイスラエルとの国交正常化合意に危機感を抱いたためだと解説する中東専門家がいま

すが、国交正常化で追い詰められたのは、世界や中東諸国に向けて外交的なアプローチをしてきたパレスチナ自治政府のアッバス議長です。ハマスは政治部門による民衆動員デモから、軍事部門による越境攻撃へと、国交正常化合意の前から続いているハマスのプログラムに基づいていると考えたほうがいいでしょう。

ハマスの越境攻撃の後、イスラエルによる大規模なガザ攻撃が始まり、2025年6月18日の時点で、ガザの死者は5万6637人となっています。これはガザの保健省が病院から上がってきた数字を集計しているものです。ビルが崩れて、瓦礫の下にあって回収もされていない遺体が1万5000人以上あるとの発表もありました。死者の中で、女性が8304人、子どもが1万5000人。子どもは1万8000人という数字もあります。

問題は、そのようなパレスチナの惨状に対するアラブ諸国の沈黙です。5月中旬にバグダッドでアラブ首脳会議が開かれました。招待されたアラブ諸

国20か国の国家元首のうち、出席したのは5人。エジプト、ソマリア、亡命中のイエメン大統領、そしてパレスチナ自治政府のアッバス大統領の5人だけです。湾岸諸国の首脳は出席していません。さらに最終声明では「進行中のイスラエルの侵略と悪化する人道状況を踏まえ、ガザ地区への人道援助の即時提供を求める」というのが最初に出てきます。

ガザのようなことが起こっても、2020年に国交正常化したアラブ諸国が、関係を見直すなどの対応をとることはありません。いかにアラブ諸国が、イスラエルや米国に対して及び腰であるかがわかります。ロンドンやパリで反イスラエルの大規模なデモが起こっても、アラブ諸国ではデモが起こることとはありません。もちろん、アラブ諸国の政府が規制しているためです。

これまでイスラエルのガザ攻撃を非難してきたのは、イランであり、イランの影響下にあるレバノンのシリア派組織ヒズボラや、イエメンのシーア派組織フーシ派です。5月にイスラエル

がイランの核施設を攻撃し、それに米国も加わったことで、イスラエルとイランの戦争という中東危機の恐れが高まりました。幸いにして、10日ほどで軍事的な衝突は停戦となりました。イスラエルとイランの戦争になれば、イランからのミサイルによる報復攻撃でイスラエルも無傷では済まないことも明らかになり、世界の原油の重要なルートであるホルムズ海峡をイランが封鎖する可能性が取り沙汰されるなどして、米国のトランプ大統領も、双方に強力に停戦を求めることになりました。

イスラエルとイランの停戦の後も、イスラエルのガザ攻撃は続いています。これまでは表に出なかった「アラブの沈黙」が、アラブの民衆によって意識されることになるでしょう。

私たちが遠い日本からニュースやSNSで流れるガザの状況を見るだけでも、目を背けたくなるような状況ですが、アラブ民衆はそれを日々、見ているわけです。パレスチナ人の悲しみや叫びはアラビア語ですから、アラブの民衆は、直接理解することができます。アラブの民衆、

特にアラブの若者たちがどんなに心を痛め、怒りを募らせているかを考えると、恐ろしくさえなります。

アルジャジーラの番組で、ガザの悲惨な状況に対して、欧州各国もイスラエルを批判し始めましたが、アラブ連盟は動いていないことを批判するニュースのビデオクリップがあり、ユーチューブに掲示されています。そこに1300の視聴者のコメントがついています。その中で最も多くの「いいね」がついているのは、「アラブ連盟にはガザでくじけない子ども靴底ほどの価値もない。開催されるほどに屈辱と抑圧を感じる」「パレスチナ人を虐殺しているのはイスラエルではなく、アラブと国際社会の沈黙であり、アラブとイスラエルの国交正常化だ」という二つでした。

アラブ諸国の統治の正統性が揺らぎ、それが繰り返し、中東危機を引き起こしてきたという、先に説明したような構図を考えると、私は中東危機はこれから起こるのだろうと危惧しています。

これまでパレスチナ危機に続いて、中東危機が起こってきたことを考えれば、現在のガザの悲劇が新たな中東危機につながると考えなければならぬでしょう。いつ、どこで、どのようなことが起こるかは、起こるまではわからないというしかありません。すでに説明したように、中東での統治の正統性がゆらぐことによって「革命、戦争、テロ」という三つの異なる危機の形をとるわけで、民衆革命だった「アラブの春」が、シリア内戦という戦争につながり、その中で「イスラム国」(IS)の出現という過激派のテロの形が出てくるというように、三つの形態が絡み合っており、相次いで起こることもあるのです。

中東では報道の自由も、政治の自由もない強権体制がはびこっているのです。民衆のデモも抑えられ、反政府的な出来事もメディアには出ません。危機の予兆的な動きが抑えられ、メディアにも報じられないため、反政府的な動きが抑えられなくなって初めて、海外メディアに出るため、メディアに出たとき

には、その動きはすでに抑えられないほど広がっていると考えなければなりません。中東は、いま、そんな危険水域に入っていると考えるべきでしょう。

(2025年6月26日・公開講演会)

筆者略歴(かわかみ・やすのり)

元朝日新聞記者。カイロ、エルサレム、バグダッドなどに駐在し、パレスチナ紛争、イラク戦争、「アラブの春」などを現地取材。中東報道で2002年度ボーン・上田記念国際記者賞受賞。

2015年にフリーになり、ベイルートのパレスチナ難民キャンプに通って取材したパレスチナ人のヒューマンストーリーを『シャティラの記憶―パレスチナ難民キャンプの70年』(岩波書店、2019年)として刊行。最新刊は『ハマスの実像』(集英社新書、2024年)、他に『中東の現場を歩く』(合同出版、2015年)、『「イスラム国」はテロの元凶ではない』(集英社新書、2016年)など。

公開講演会記録

人生100年時代における医療ニーズとシーズ

——ベンチからベッドサイドへの橋渡し研究

筑波大学医学医療系教授・革新的創薬開発研究センターセンター長 澁谷 彰



はじめに

本日は「人生100年時代における医療ニーズとシーズ」のタイトルでお話いたします。「医療ニーズ」とは医療現場で必要とされているが、まだ満たされていない、または充分な対応ができていない医療上の要求や課題のことであり、「医療シーズ」は将来医療ニーズに応え得る可能性のある基礎研究から見出されたものです。また、「ベンチからベッドサイドへ」という副題を掲げました。「ベンチ」は実験

台を指し、基礎研究を意味します。私のもとと臨床医として内科診療に携わっていました。手塚治虫の漫画『ブラック・ジャック』のように、どんな患者さんでも治せるような医師になることを目指していましたが、途中で方向転換し、後述する「エドワード・ジェンナー」のような研究医を目指すようになりました。

ブラック・ジャックのように目の前の患者さんを救うことも重要ですが、基礎研究から新しい医療や医学を開発することで、これまで助けることができなかつた数えきれない人々を後世に

わたって救うことができる非常に夢のある仕事だと感じたからです。しかし、基礎研究の成果を実際に患者さんのために役立てるには、その間を橋渡しする「開発研究」が必要です。本日は、人生100年時代における「ベンチからベッドサイドへ」に向けた基礎研究から開発研究について、私の経験をもとにお話しさせていただきます。

1. ワクチンの歴史から学ぶ——自然に対する畏敬と科学への希望

「疫病神^{やびびょうしん}」という言葉があります。

これは、近づくことと不運なことや凶事をもたらすものとされ、社会的な関係性を示す言葉として使われてきました。

一方、この言葉にある「疫病」は「えきびょう」とも読みます。ウイルスや細菌などの病原体による感染症、特に局地的（エピデミック）に、あるいは世界規模（パンデミック）で流行する感染症を指します。記憶に新しい新型コロナウイルス感染症もパンデミックの疫病の代表例といえます。

人類の歴史は、さまざまな病原体による感染症との戦いでした。その代表的な例の一つに天然痘がありました。古い絵図に「痘瘡神図」として描かれている「痘瘡」は、天然痘のことでした（図表1）。天然痘は高熱とともに全身に発疹が出現し、およそ半数に近い人が死亡した恐ろしい病気でした。運よく助かったとしても、発疹が潰れて潰瘍になり瘢痕が残ります。顔にできるとあばたと言いました。「あばたもエクボ」の「あばた」はこれに由来します。これは感染力が極めて強い天

図表1 疫病神「痘瘡神図」



然痘ウイルスによる感染症で、近づく病気が移るのでその病人はまさに疫病神でした。昔はウイルスの存在自体が知られていませんでしたが、20世紀に入り電子顕微鏡が開発されてウイルスという病原体が初めて目に見えるようになり、これが病気を発症させることがわかってきました。つまり、疫病神の本体はウイルスだったということです。我が国には7〜8世紀頃の遣隋使や遣唐使によって天然痘ウイルスが大陸からもたらされ、流行するようになったとされています。奈良時代の745年に聖武天皇は奈良の大仏を建立しましたが、これは疫病退散を祈願するためのものでした。2024年のNHK大河ドラマの『光る君へ』はそこから下って平安時代が舞台でしたが、占いと祈禱を生業とする高名な陰陽師・

安倍晴明が登場し、貴族が病気になる3日3晩祈禱していました。迷信が人類の長い歴史を支配していたという例です。苦しいときに何かに頼るということは人のさでもあります。しかし、18世紀にエドワード・ジェンナーが登場します。彼はイギリス南部地方の酪農地帯の医者でした。当地でも天然痘の流行が散発する一方、牛にもヒトの天然痘のような病気（牛痘）がありました。ジェンナーは、日頃天然痘患者を診療する中で、牛痘にかかった牛の乳搾りをしている女性は手に牛痘の膿がついて、天然痘にかかりにくいことに気づきました。彼はこのことから「牛の天然痘が体内に入ると、人の天然痘に対する予防効果がある」という仮説を立てました。そして、これを検証するために、牛痘の膿のある子どもの皮膚に植え付け、天然痘の感染を予防できるかを観察しました。まさに人体実験ですが、その後も次から次へと子どもに試し、合計16人の結果か

ら、これが天然痘の予防に有効であることを証明しました。そしてその結果を論文にまとめ後世に残しました。仮説を立てて、これを検証し、その結果を考察し、報告することは、まさに科学のアプローチそのものです。ワクチン(Vaccine)は牛痘(Vaccinia)を語源としていますが、これは瞬く間に世界に広まりました。我が国でも幕末に種痘が導入され、明治になって種痘法が制定され、これは国民の義務になりました。ウイルスはヒトなどの宿主に寄生して初めて増殖しますが、ワクチンによって感染することができなくなれば、ウイルス自体がだんだんと少なくなっていくます。世界中でワクチンが普及した結果、自然界から天然痘ウイルスがなくなりました。そして1977年にはソマリアで確認された患者が最後となり、1980年に世界保健機関(WHO)が天然痘の根絶宣言を出しました。これは感染症に限らず病気自体が地球上から消滅した唯一の例であり、医学・医療の歴史における金字塔と言えます。

最近ある国際線の飛行機の中で、今年公開された『雪の花』という映画を見ました。幕末の福井藩の漢方医の物語です。当地でも天然痘が流行すると手だてがなく、ただ死んでいくのを見ているしかない。村を守るために、死んだ人は焼き払い、まだ生きている人は、老人でも子どもでも山に追い払わざるを得ないといった悲惨な状況でした。そこで主人公である漢方医は、たまたま西洋に種痘という方法があることを知り、その方法を知る京の都の蘭方医の弟子となりました。最大の問題は牛痘の膿を京から福井まで運ぶことでした。経験上、膿をそのまま運んだら効果がなくなることがわかっていました。現在ではそれではウイルスが死滅してしまうためと理解できます。膿自体はオランダから長崎の出島を経由して日本に入ってきていましたが、それをどうやって持ってきたかという、船に何十人もの子どもを乗せ、まず最初の子どもに接種してできた膿を次

の子どもへと、次から次へリレー式に植えて運ぶというやり方をとっていました。映画では猛吹雪の山中を子ども連れの一行が、リレー式に植え継いで苦難の山越えの場面がハイライトシーンで描かれていました。

天然痘の歴史をもう一度振り返ってみます(図表2)。紀元前12世紀ごろ

図表2 自然に対する畏敬とその仕組みを解き明かす科学への希望

ワクチン開発の変遷

1. 天然痘流行

- ・ 前1157年 ラムセス5世死亡(エジプト)、ミイラに天然痘の痕跡
- ・ 6世紀 日本へ伝播 東大寺大仏(745、聖武天皇)
- ・ 1796年 牛痘ワクチンの開発(ジェンナー)
- ・ 1980年 天然痘根絶宣言(WHO)

2. コロナの流行

- ・ 2020年 SARS-CoV2(コロナ)の流行
- ・ 2020年 ワクチン(mRNA, DNA)の開発

免疫学、ウイルス学の発展、基礎科学の知見、テクノロジーの進歩
(遺伝子組み換え、遺伝子増幅技術(PCR)、遺伝子配列解読技術)

のエジプトのラムセス5世のミイラに天然痘に感染した痕跡が見つかっています。したがって、天然痘はその頃にはすでに少なくともエジプトでは流行していたと考えられます。人類が侵略や戦争で地球上を大移動する中でウイルスも世界中に広まり、流行を繰り返していきました。ラムセス5世の時代からおよそ3000年を経て、ジェンナーが牛痘ワクチンを開発しました。何千年もの間、疫病神として人類を苦しめてきた感染症が迷信の世界から抜け出したのです。

一方で、2020年初めにパンデミックが始まった新型コロナウイルス（COVID-19）感染症に対しては、その年末にはワクチンが開発され、実用化されました。この驚くスピードは、メッセンジャーRNAワクチンと呼ばれる新しい技術が開発されたからであり、この技術は2023年にノーベル生理学医学賞を受賞しました。これは、科学技術——医学の領域の免疫学、ウイルス学ばかりでなく、さまざまな基礎科学の膨大な知識、技術——の蓄積

によるものであり、この歴史の流れはいかに科学というものが大事かということを端的に示しています。私はこれを自然（ヒトや病気も含めたすべてのもの）に対する畏敬とその仕組みを解き明かす科学への希望として捉えています。

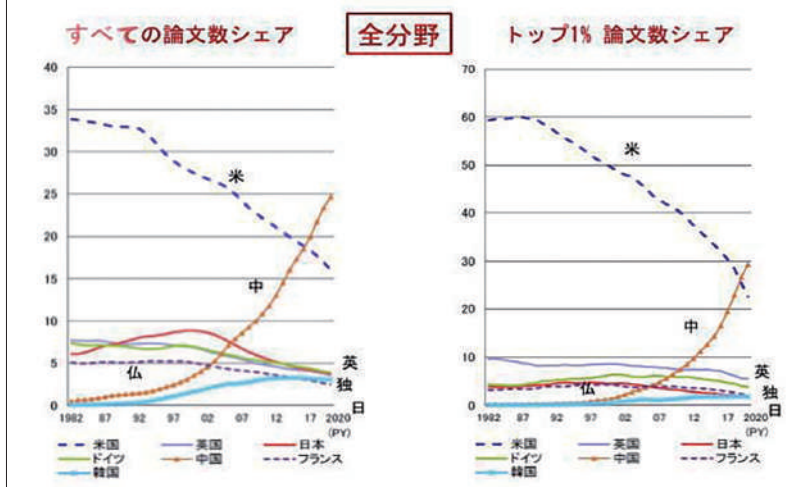
2. 激変する米国の科学状況と中国の追い上げ

このような科学技術の発展の歴史に逆行して、現在、米国の科学研究を取り巻く環境は激変しています。トランプ・ケネディクライシスと言えます。2026年米政府予算では、国立衛生研究所（NIH）に対しては40%、疾病対策センター（CDC）は53%削減されました。ケネディ厚生長官はCDCの予防接種実施諮問委員会の委員17名を全員罷免し、反ワクチン派の委員を入れたという報道もなされています。WHOからも脱退し、予算も62%削減、HIV対策プログラム「大統領エイズ救済緊急計画（PEPFAR）」

は30%、世界エイズ、結核、マラリア対策基金は100%削減です。グローバルヘルスへの甚大な影響が避けられません。医学医療以外にも、科学技術政策の中心となる米国立科学財団の予算は57%削減、クリーンエネルギーに対しては99%削減、さらに、ハーバード大学をはじめとする多くの大学への予算補助の削減も進んでいます。これほど科学を無視する姿勢には呆然自失を超え、科学者として憤りと悲しみを覚えます。これは米国だけではなく、世界にとっても大きな影響があります。科学技術研究において米国がこれまで築いてきた世界のリーダーとしての信頼や尊敬が一举に損なわれるような状況です。身近な例でも、いろいろな国際会議に米国の研究者の参加が激減しています。それは、NIHの予算がなると旅費や参加費の支出が困難になってきたことや、米国以外の国籍の米国の研究者の場合、いったん国外に出たならば再入国できなくなる可能性があるなどの理由によるものです。

一方、中国は科学技術の発展に国家

図表3 中国の科学技術の発展
2008年～ 外国人招致事業「1000人計画」



を挙げて取り組んでいます。2008年から海外ハイレベル人材招致計画「千人計画」を開始し、海外から優秀な研究者を集めてきました。研究開発費の政府予算も、米国を追い抜き、中国が世界でトップとなっています。その結果、中国は論文数シェアや、引用数の多い質の高い論文数で米国を追い抜きました(図表3)。ただし、生物

学・医学の領域に限れば、いまだに米国が圧倒的な優位を保っています。しかし、この先は予断を許さないものがあります。日本はというと、2004年の国立大学の法人化以来、政府からの予算が毎年削減され、科学技術の世界における日本の地位は低下しつつあります。日本にとっては、対岸の火事もさることながら、まずは足元にも眼を向けなければいけないことも事実です。

3. 免疫学研究の最前線—— 病気の克服を目指して

「免疫は、疫(病)から免れる」と書くように、細菌やウイルスなどの病原体から体を守るものと考えられてきました。しかし、近年の研究の進展により、免疫は病原体だけでなく、「自己」と「非自己」——すなわち自分以外のすべてのもの——とを識別し、侵入した非自己を攻撃・排除して体を守る仕組みであることが明らかにな

りました。すなわち、免疫は、病原微生物に限らず、アレルギー抗原、移植臓器、さらには体内で発生するがん細胞へも攻撃します。そして重要なことは、免疫は自己を攻撃しないという原則です。免疫の働きを担っているのは血液などに含まれる白血球です。白血球はリンパ球や好中球など、さまざまな種類の細胞から構成されています。免疫は「諸刃の剣」であり、非自己を攻撃する際に炎症反応を引き起こします。この炎症が過剰になると、自己の組織にまで影響が及び、アレルギーや自己免疫疾患、さまざまな炎症性疾患などの病気が発症します(図表4)。

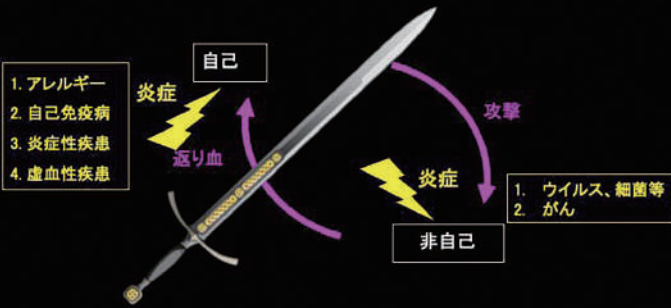
したがって、免疫を制御することができれば、さまざまな病気を克服することが可能となります。

私たちは長年、免疫受容体の研究に取り組んできました。免疫受容体は、免疫細胞の表面に存在し、細胞外の異物や抗原を感知して免疫反応を誘導するタンパク質です。研究の世界でよく言われることは、どんな新しい研究をしても同じような発想で同じ研究をし

図表4

免疫は諸刃の剣

免疫反応 = 炎症（免疫細胞の活性化）



ている人が世界で3人はいるということ。しかし、研究というのは誰かの二番煎じでは意味がありません。そこで、私たちは誰も今まで見つけていない免疫受容体を新しく自分で見つけてくることにしました。それでは、新しく見つけるということはどういうことでしょうか。

免疫受容体はタンパク質の一つです。個々のタンパク質は、細胞の中の染色体に螺旋状に組み込まれているそれぞ

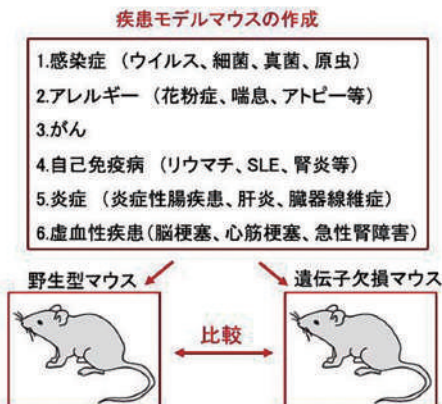
れの遺伝子DNAを元にして作られます。新しいタンパク質を見つけるということは、この遺伝子の中に今まで知られていなかった新しいDNA配列を見つけていうことになります。これをDNAクローニングと呼んでいます。1980年代後半から90年代ぐらいにその技術が開発され、私たちはその技術の進歩の上に乗って新しいものを発見してくるということになります。一般にどのような大発見であっても、それまでの科学の発展の積み重ねを基盤としていないものはないと言っても過言ではありません。その結果、私たちは30年近く前に米国で研究を行っていた際に新しい免疫受容体を発見し、これにDNAM-1と名前をつけました。その後、大変幸運にも、2000年にFcεR/μR/2003年にMAIR-I,MAIR-II/2010年にAllergin-1/2019年にClec10aなどの新しい免疫受容体を次から次へと見つけることができました。

私たちの研究のモチベーションは、将来医療に応用できる研究成果を出し

たいということでした。そこで、次にこれらの新しく発見した免疫受容体が何らかの病気の発症に関わっているかを明らかにしようと研究を進めました。そのために、それぞれの免疫受容体をつくる遺伝子を切り取ってその免疫受容体をなくしたマウスをつくりました。このようなマウスを遺伝子欠損（ノックアウト）マウスと呼びます。このような遺伝子欠損マウスに、いろんな病原体を感染させる、アレルギーをつくる、

図表5

新しく発見した免疫受容体は、病気の発症に関与しているか？



がんをつくる、自己免疫病をつくる、いろんな炎症などを誘導するなどして、さまざまな病気のマウス（疾患モデルマウス）をつくりました。これを遺伝子欠損していない元のマウス（野生型マウス）に同じ病気をつくった際に、病気の発症に違いがないかをさまざまな角度から解析していきました。そこで何らかの違いがあれば、欠損させた免疫受容体とその病気の発症に関与していることがわかります（図表5）。このような解析の結果、私たちが新しく発見した免疫受容体がいずれもさまざまな病気の発症に重要な働きを持っていることがわかってきました。

4. 人生100年時代の医療ニーズ——脳梗塞治療薬の開発を例に

世界の人々の平均寿命は右肩上がりに伸びています。とりわけ日本は、少子超高齢社会であり、出生率がどんどん低下していく一方で、女性の平均寿命は世界で1番、男性は世界で3番目

の長寿国です。しかし「あなたは何歳まで生きていたいと思いますか」と質問したときに、多くの方々は答えに逡巡します。平均寿命は、今年生まれた赤ちゃんが何歳まで生きられるかとい

うゼロ歳児の平均余命と定義しています。一方、平均寿命に対して、健康寿命という言葉があります。自分で自分の身の回りのことができなくなるまでの年齢です。平均寿命と健康寿命の差が女性で12年、男性でも8年あります。つまりこの差は、日常生活が制限されている期間といえます。この差がゼロである、つまり健康なまま生きてそのまま कोरोリと死んでしまふピンピンコロリが理想の死に方と多くの方が考えています（図表6）。したがって、いかにして健康でいられる期間を長くすることができ

るかが、これからの大きな医療ニーズともいえます。

死亡原因の変遷を見ると、戦前は肺結核などの感染症で亡くなる方が半分ぐらいいました。現在、感染症はかなり克服されてきた一方で、脳卒中、心臓病などの循環器疾患とがんによる死亡の比率が増

図表6



出典：内閣府『高齢社会白書』2020年版を基に作成

注：元データは『簡易生命表』『完全生命表』『健康寿命における将来予測と生活習慣病対策の費用対効果に関する研究』『健康日本21推進専門委員会資料』

加してきています。特に脳卒中の一つである脳梗塞は、年間約16万人が発症しており、そのうち20%近くの方が死亡し、たとえ生存できたとしても多くの方が寝たきりになったり、介護が必要となるなど、健康寿命を脅かす可能性の最も高い疾患の一つです。

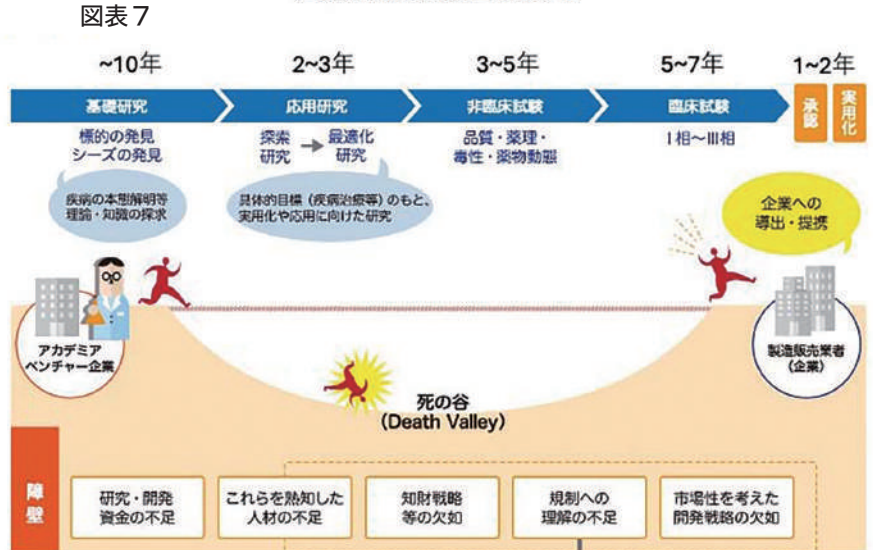
上述したように、私たちが新しく発見した免疫受容体はいずれもさまざまな病気の発症に関与することが明らかになりました。その中でMAIR-1遺伝子欠損マウスは、野生型マウスと比較して、脳梗塞の症状が著明に軽症であることを発見しました。これは、MAIR-1が脳梗塞の症状を悪化させることを示しています。そこで、MAIR-1受容体の働きを抑える抗体を作成し、野生型マウスに投与すれば、脳梗塞の症状を改善できるのではないかと考えました。実際に作成した抗体は、期待通りに神経症状を著明に改善し、脳の障害も軽減することが確認されました。これにより、この抗体は、脳梗塞に対する画期的な薬剤となる可能性が出てきました。現在、脳梗塞の治療法としては、発

症から4時間以内であれば血栓溶解薬を投与したり、16時間以内であればカテーテルで血栓を除去したりする方法があります。しかし、これらの治療は脳卒中センターなどの設備の整った病院でなければ受けられず、また時間的制限もあることから、患者全体の約2割しか受けられていません。残りの8割の患者さんには有効な治療法がほとんどないのが現状です。私たちが開発している抗体医薬は、脳梗塞発症後に1回の静脈注射で効果が期待でき、小さな病院でも使用できます。これが実用化されれば、寝たきりや介護を必要とする方を減らすことが可能となり、健康長寿社会の実現を大きく前進させることができると考えています。さらに、私たちの研究から、この抗体医薬は脳梗塞だけでなく、心筋梗塞、脊髄損傷、腎臓病、敗血症など、さまざまな病気にも有効であるこ

とがわかっており、将来広範囲の疾患への応用が期待できる革新的な医薬となることが期待できます。

5. 医薬品の開発における課題

図表7 医薬品の開発と死の谷



しかし、医薬品開発には長い時間と莫大な費用が必要です（図表7）。一般に基礎研究から動物での非臨床試験、さらに健常者や患者を対象とした臨床試験にはおよそ10年以上の期間がかかり、またそのために数百億円〜数千億円の開発費がかかるとされています。

そのため、良い医療シーズを発見できたとしても、大学での研究室単独で医薬品を開発することは不可能で、製薬企業へ特許許諾をし、共同開発または製薬企業での開発委託をすることが不可欠です。しかも、医療シーズの中で、最後に薬剤として承認される成功率はおよそ0・01%以下と極めて低く、そのような中で製薬企業は新薬の開発費を賄い、かつ経営を維持するための収益を図らなければなりません。

そこで、実際の開発にあたっては、(1)アンメットメディカルニーズ（いまだ良い治療法がなく必要性が高い）、(2)既存薬に対する優位性（すでに使われている薬剤に比較したメリットの大さき）、(3)各製薬企業の開発戦略（興味のある対象疾患、臨床試験の容易性、

開発コストおよび利益の見込み）が大きく影響します。

医薬品の開発にあたって、基礎研究から実用化までの成功率の低さ、開発期間の長さなどの大きな隔たりは「死の谷」と呼ばれています（図表7）。

我が国では、これまでアカデミア発

のシーズを医薬品として開発する文化がアカデミアにも製薬企業にもほとんどありませんでした。しかし、特に欧米、特に米国では、この「死の谷」を乗り越え、スピードアップを図るために、アカデミア発のバイオベンチャーが橋渡し役を担い、多くの医薬品が開発されています。最近では、日本でも、大学発ベンチャーの設立が盛んになりつつあり、国や大学もその支援に力を入れています。私も2018年に筑波大学発ベンチャー「TNAX Biopharma 株式会社」を創業し、大学の支援やベンチャーキャピタルからの資金を得て医薬品の開発を進めています。また、主に製薬企業との共同研究の促進を目指して、2019年に「筑波大学革新的創薬開発研究センター」

を発足しました。難病で苦しむ患者さんの助けとなることを夢見て、多くの方々から協力を得ながら、革新的な医薬品の開発に挑戦しているところです。（2025年6月12日・公開講演会）

筆者略歴（じぶや・あきら）

秋田県横手市出身、1981年北海道大学医学部卒、内科臨床12年を経て、1993年米国DNAX分子細胞生物学研究所で免疫学研究開始。理化学研究所免疫アレルギー研究センターチームディレクター、筑波大学基礎医学系長、筑波大学若手研究者育成推進委員会委員長、文科省リディング大学院ヒューマンバイオロジー学位プログラムリーダーなどを歴任。2009年高松宮妃癌研究基金研究奨励賞、2015年第26回つくば賞（茨城県科学技術振興財団）、2020年文部科学大臣表彰科学技術賞、2024年野口英世記念医学賞、日本免疫学会ヒト免疫学研究賞などを受賞。

大平正芳をキリスト教に導いた クリスチャン科学者、佐藤定吉

北京日本人学術交流会責任者 山口直樹（会員）



はじめに

佐藤定吉という名前を聞いてどれだけの人が、反応できるだろうか。

大平正芳をキリスト教に導いた科学者だが、その内実はほとんど知られていなかった。

ここでは筆者の専門の科学史の視点から佐藤定吉の学問業績を振り返ると同時に彼の科学思想の意味をも考えてみたい。

1. 佐藤定吉という科学者について

佐藤定吉は、1887年11月20日、徳島県那賀郡富岡町（今日の阿南市）の第住町において父佐藤治吉、母のぶの次男として誕生した。

子どものころから秀才の誉れ高く、中学校5年の過程を3年半で終了したという。

1905年、佐藤は、京都の第三高等学校の理科へ入学する。そのころ日本の社会では、佐藤が小学生のころに日清戦争があり、中学時代には日露戦争があり、海軍を志願して日本国家のために尽くそうと考えていたようだ。しかし、体が弱く、海軍に入れなかつ

た佐藤は、火薬の研究で日本国家に貢献したいと考え、三高の理科を選んだようである。

三高では、森総之助という物理の先生に出会い、影響を受けたようである。また、三高のYMCAにあっては、片山哲をはじめ多くの親しい友人を得たという。そしてこのころから佐藤のキリスト教への信仰も始まっている。

やがて、工業界で身を立てるとの志を持って、1908年9月に当時の東京帝国大学工科大学応用化学科へ入学した。在学中、追分にあった帝大YM

CAの寄宿舎に入寮し、ここで多くの信仰の友を得ている。そのときのことを後に首相となった片山哲は以下のよう^①に回想している。

佐藤君は私と同じ明治二十年生まれであり、三高に入学して初めて顔を合わせるようになった。私は第一部丙（法科）、彼は第二部（工科）であった。

三高では最初の1年は全員が寮生活をするようになっていたので、お互いに何かと顔を合わせる機会も多かったのであるが、私たち二人の交友はまずイエスを通じて生まれた。

彼をキリストに近づけるきっかけをつくったのは、おこがましいけれども私だったと思っている。そしてこのことが彼と私との間をさらに近いものにしたのである^②。

三高で生まれたキリスト教を通じた交友は、東大でも続くことになった。

三高を卒業すると私たちは共に東大を選んだ。そして東大のYMCA寄宿

舎に入った。実はこのYMCAには私が彼を引っ張って入れたのである。彼はまだキリスト教信者といったところまでは行っていなかったが、先輩格の三田村篤四郎君を通じて、求道者でもよいということにしまったのである。

このYMCAでの三年間の日常生活が、彼のクリスチャンとしての生涯を力強く決定せしめたのであった^③。

吉野作造が、東大YMCAにかかわっていたことは注目されるが、同時に佐藤は、それと対立する人の説に興味を示していた。

佐藤のキリスト教への帰依を決定的にしたのは、チフスという病からの回復であったようだ。

そしてキリスト教に入信した佐藤定吉は、「科学と宗教」という科学哲学的テーマを追求していくことになる。

1912年東大卒業時は、法学者の末弘厳太郎らと銀時計をもらっているが、その場には、明治天皇も列席していた。このとき佐藤は大きな感激を覚

えたという。

このときの天皇への尊敬の念が、後の佐藤の科学思想にも影響を与えていくことになる。

2. 佐藤定吉の科学者としての業績

1912年、東大卒業後、佐藤はただちに九州帝国大学工学部教授として、福岡に赴任した。当時九州帝国大学では、荒川文六というキリスト教の学者が総長をしており、佐藤は、荒川のことを尊敬し、影響も受けたようである。

その後、1914年、東京帝大講師も兼任し、一時、本郷追分にも住んでいたが、1916年、井上仁吉の世話で東北帝大教授に任命されて仙台に赴任した。井上仁吉は、東北大学総長ともなる佐藤の恩師でもあり、キリスト教の信仰を持つ科学者であった。同時にまた井上は、後に満鉄中央試験所の所長となり「満州国」の科学技術行政のトップとなる丸沢常哉の恩師にもあたる科学者であった^④。

1915年、文部省からアメリカへ留学を命じられ、ロックフェラー研究所へ出張し、高峰讓吉研究室で研究を重ね、帰国後、1921年「大豆蛋白の工業的応用」という論文により工学博士の学位を得ている。その後、汎太平洋平和会議に日本学者代表として沢柳政太郎や野口英世らとともに出席している。

この1915年、東北帝国大学臨時理化学研究所研究主任を命じられている⁽⁴⁾。

また、1919年、東北帝大在職中、研究の都合上から東京目白の下落合に拠点を移し、「佐藤工業化学研究所」を設立し、学生の指導と研究の生活に入った。また研究所の工場を向島に設け大豆蛋白の合成樹脂を発明し、「サトウライト」と名付けて、今日のプラスチック研究の開拓者となり、これが住友ベークライトとして引き継がれるに至った。

そして、佐藤の科学者としてのもうひとつの業績は、戦時色と言われたカーキ色である。このカーキ色は、佐

藤が発明したものであった。卒業論文で扱ったテーマであったが、その論文で言及したのが、京都の稲畑染料店、のちの住友化学である。

大橋退治という佐藤の友人は、佐藤の業績について次のように回想している。

佐藤さんは、卒業当時から、佐藤ライトという自分の名前をつけて、三共製薬と一緒にあって、大豆の蛋白から今でいう、プラスチックを作った。

これが日本におけるプラスチックの初めなのです。

佐藤さんは、のちに東北大学の教授になられたが、そこで有力なる、もっとも大切なプラスチックの研究をずっと続けてやられまして、そこに立派な弟子をお持ちになり、今日プラスチックの成功は、まさに佐藤君の功績であるといつて過言ではないのであります。

また、大豆から作ったプラスチックでつくった佐藤君の製品がアメリカの自動車会社のフォードに認められて、彼

を招聘して是非その指導してもらいたいというので、フォードのところへ先生が行かれて、根本から研究をやってフォードが非常に共鳴したのです。

当時大豆というのはソーヤ・ビーンで満洲大豆のことですが、満洲にあってその当時約三百トンといわれた。しかしそれをやるならもっと大きくやろうというので、フォードは、それからフォードの工場がありますデトロイトを中心に大豆の移植をはかって、その結果、今日アメリカの大豆は少なくとも二千五百万トン位であります。これはフォードと佐藤君との合作によるものといつてよい。そのおかげで、今日われわれが味噌、醤油を食べられるということも、ひとつの大きな仕事であって、私は油の方をやったのですけれども、油の方についても我々が関心を持たざるを得ない大事業であったのであります⁽⁵⁾。

佐藤は、日本におけるプラスチック研究の先駆者であり、カーキ色の染料の研究を行い、それは軍服に用いら

れ、大豆蛋白の利用は、満州資源開発の一助として取り上げられたものであった。

3. キリスト教信仰に関連する動き

1921年ごろから日本救世軍の山室軍平を助けてキリスト教の伝道を始めるに至った。

東京神田神保町にある救世軍本宮において毎日曜日の礼拝で山室軍平の説教の前座を務め、科学者の立場からキリストを求め、科学と宗教の連続公演をし、これは後に『自然科学と宗教』という著書となった。

それ以来、佐藤は、山室軍平とは家族ぐるみのつきあいをしたという。

1924年8月12日、佐藤の五女慈子が、疫病にかかり軽井沢の山村で2歳半で死去した。

この出来事をきっかけに己の地位、名誉、財産、家族など一切を捨てて己が十字架を背負いキリストに従うことを決意したという。

そして「全東洋をキリストへ」とい

う使命が与えられ、全東洋をキリストに返すため自らの科学の研究も家族も捨てて伝道に一生を捧げようと決心したという。

まず1926年の初めより全国高等学校および大学の学生の中に飛び込んで学生伝道を始めている。その第一陣が浦和高等学校の学生たちによって始められた。ここでは十字架のついた提灯を持った学生たちが路傍に立って大声で賛美歌を歌い、道行く人たちに神の福音を語りかけた。

そして、1927年5月に「イエスの僕会」を設立した。軽井沢の霊響山道場を本拠地に、主に学生などが中心となったこの教団は対米戦が始まるまで全国で精力的に伝導活動を行っている。この佐藤の伝道活動は全国的に好評だったらしく、これによってクリスチャンとなった一人に大平正芳もいた。孫娘の渡邊満子『祖父 大平正芳』（中央公論新社、2016年）にそのことについての言及がある。「高松高商卒業後、祖父は科学者でもあった佐藤定吉氏の開発した薬品を販売して

「僕会」の活動費用に充てようと、しばらく大阪で会社勤めをしていた。しかし、このもくろみは、実を結ばず、育英資金を得て、大学に進学した^⑥がそれである。

大平は『私の履歴書』では、

イエスの僕会の佐藤先生の所説は、我々に神に対する畏れの念を植え付けるのに役に立ったが、その神がなぜ「愛」であるかについては、どうしても納得がゆくものではなかった。そのためにはキリスト教の教えを待たねばならなかった。したがって僕会の人々もその後、キリスト者としての道を歩んだ人が多く、先生の科学と宗教についての論説は、キリスト教への呼び水的な役割を果たしたものだ。私の場合もその後、聖書を通してキリスト教に進んだ^⑦。

と記している。佐藤定吉によってキリスト教に関心を持ち、その後、教会から離れ、聖書をとおしてキリスト者になったということなのだろう。

1933年1月には「日本興国同盟」が発足する。これはキリスト教の信仰に基づき、国家を興隆させようという運動であった。佐藤の恩師である井上仁吉はじめ新渡戸稲造、田中龍夫、長尾半平など当時のキリスト者の学者、知的指導者によって結成されたものであった。

「イエスの僕会」と並行して、一般人にも伝道を広げていこうとした。この運動は長続きせず、数年で解消してしまうが、これは後の「皇国基督会」の基盤となるものであった。

1941年にはイエスの僕会を解散、「皇国基督会」を結成し、軽井沢で執筆活動を行うようになる。大平は、このような皇国神学には、ついていけないものを感じていたのかもしれない。

「父の本意は何とかなしてキリスト教を日本に土着させたいと念願していたものと思う」と息子の佐藤信が言うように、戦中の佐藤はその目標を達成するためもっぱら神道を中心に研究していたようである。

佐藤は、キリスト教徒が神社参拝や御真影へのお辞儀などを偶像崇拜だとすることは「欧米式の基督教義を直訳的に押し付け」るものと批判していた。佐藤にとって神道などの東洋的思想はキリスト教と矛盾せず、むしろキリスト教を真の姿に戻すためには必要なものだと考えていた。『イエスの僕会宣言』では初代キリスト教の復興を念願するとし「我らは神道・儒教・仏教・武士道を東洋的旧約と認め、キリストの福音による新約日本の建立を念願す」「我らは東洋的天分を以て基督教の真理の光をその完全なる姿に於て仰がんとす」とある。その中でも特に神道や日本精神を重視していた。

4. 丸沢常哉と佐藤定吉

満鉄中央試験所の最後の所長を務めた丸沢常哉と佐藤定吉は、理化学研究所に対抗して構想されていた民衆立研究所の同志であり九州帝国大学における同僚でもあった。

しかし、その民衆立研究所の構想が実現されることはなかった。それは、

丸沢常哉が、万有還銀術というものに入れ込み信じることによって世間を騒がせてしまい、その責任をとることに断念せざるをえなくなったからであった。

このことに関して、山本勇三という貴金属を研究することになる教え子は、以下のように回想する。

私は、佐藤定吉先生の教室、言わば有機化学工学の専攻でありながら、大学卒業後今日にいたるまで全く畑違いの貴金属の研究だけで過ごしてきたものであります。〔中略〕

大正十年十月のある日、東北大学工学部化学工学科教室で雑誌会の例会が催されました。〔中略〕

常の例会でしたら、集まるものは十名か二十名に留まるのですが、その日教室は超満員で〔中略〕異常な緊張が、教室を包んでいました。定刻の三時に佐藤先生が演壇に昇りました。いよいよ万有還銀の講演が始まるのでありまし⁽⁸⁾た。

その夜、山本勇三は佐藤定吉を旅先に訪ね、「先生の万有還銀術は、現在の長岡——ボーア原子力構造説やラザフォードの実験結果からみるとまったく不合理です」と反対論を唱えたところ佐藤定吉は必ずしも山本の言うことを否定せず、「今後も繰り返し真相を把握するつもりだから、若い君たちも大いに協力してくれたまえ」と述べたという。

佐藤と山本との議論は、なかなか尽きなかったが、議論は議論、学説と実験との間に必ずや調和点が見いだされるべきだとの点においては、互いに一致していった。

山本は、その後、万有還銀術の影響でコロイド銀の研究をテーマに選ぶことになり、銀コロイドを勉強したなら貴金属もわかるだろうと言われ、金製品の検定に関係し、それが機縁となつて一生をその金属の学徒としてすごすことになった。

満鉄調査部から満鉄中央試験所に移ることになった大形孝平は、丸沢常哉『新中国生活十年の思い出』（非売品、

1961年）に収録された小論、「ヒューマニズムの強靱さに畏敬」で以下のように語っている。

私をはじめて丸沢先生にお目にかかったのは、終戦の年の夏の、ある蒸し暑い夜のこと、先生が新京から中試の所長として赴任されたときに、試験所のかたがたと一しょに大連駅にお迎えしたときでした。カーキ色の国民服に戦斗帽をいただき、緊張した面もちでホームに降り立たれた先生、所員たちが先生をお迎えした光景は、まことに戦時中の満鉄最高幹部の権威にふさわしいものであったことを、今もはっきりと記憶しております。^⑨

と証言しているが、このカーキ色の染料を開発したのが、九州帝国大学で同僚であった佐藤定吉であった。^⑩

また、満鉄中央試験所の研究員だった猪口金次郎によれば、佐藤定吉は、九州帝国大学から東北帝国大学応用化学科に赴任するとき西沢恭助（東北大学総長になった半導体研究で著名な西

沢潤一の父）が、文部省から欧米留学を命じられ空きポストができ、そこに入っている。西沢恭助は、九州帝国大学時代の丸沢の教え子であった。また東北大学教授だった科学者、井上仁吉は、両者の共通の師でもあった。このように丸沢常哉と佐藤定吉は、切っても切れない非常に密接な関係にあったのである。

5. 佐藤定吉と中国

佐藤は、1937年第1回北支伝道のため北京、天津などへ旅行していた。

1940年5月には、三女道子を伴って支那大陸に第2回伝道に出かけ、同年10月には、北支、満州地方へ第3回伝道旅行に行き、新京、ハルピン、奉天などをまわった。実際、娘の佐藤道子は、「昭和十五年に、父は当時の満州国の民生部に招かれて新京、奉天、ハルピン、吉林等と各大学へ講演に参りました。その節に私も同行致し北京や蒙古へも父のお世話のため行きました^⑪」と証言している。

佐藤道子は、その後、北京の崇貞学園（キリスト者の清水安三が創設した学校で後に桜美林大学になる）の音楽教師をつとめることになる。佐藤定吉が、清水安三に頼んだのだという。2025年3月21日の国際善隣協会における高井潔司氏の報告で明らかになったのは、学校法人桜美林学園の学園長だった佐藤東洋士が佐藤道子の息子であるということであった。この東洋士という名前にも佐藤定吉の希望が込められているように思われる。

一方、国際情勢はいよいよ悪化し、日本は日中戦争から太平洋戦争にまで戦争が拡大してゆき、佐藤は家族を東京へ残し、妻とともに軽井沢霊響山道場へ疎開した。

そして、もっぱら執筆の生活に入っただけであった。

しかし、戦局はますます激しくなり、じっとしていられなくなった佐藤は、科学技術の面でも国家のために奉仕したいとの気持ちから、海軍技術研究所の嘱託となり、同研究所化学研究部の分室を軽井沢霊響山道場の一角に

疎開させ、また満州大豆株式会社の分室も疎開してきて戦時研究に努めた。しかしついに1945年8月、霊響山道場で敗戦を迎えている。

6. 佐藤定吉の科学思想—その皇国神学をめぐって

戦時中、佐藤は、伝道活動をやめ、もっぱら霊響山道場で執筆の生活を続けたが、終戦後も引き続いて、神道の研究と皇国神学の基礎原理の研究に没頭していた。

佐藤は、キリスト教を日本に土着させたいと考えてこのようなことを行っていたようである。日本古来の武士道、儒教、仏教、神道を旧約とし、新約のキリスト教を日本に植え付けたいと考えたと思われる。佐藤にとって、日本精神の完成こそがキリストの十字架である、と信じていたようである。

ここでは、その具体的な内実を見てみよう。皇国神学について述べた佐藤の著書としては、1923年ごろから

『自然科学と宗教』といった著作を刊行していたが、次第に神道とキリスト教を融合させる方向に向かうようになる。その著作は『皇国神学の基礎原理』（皇国基督會、1940年）、『皇国信仰の根本原理』（皇国基督會、1940年）の2冊に代表されるだろう。しかも佐藤定吉の場合、ここに科学の要素も入り込み、独自の科学思想を形成することになる。

『皇国神学の基礎原理』では「皇紀二千六百年を迎えて、日本はいよいよ新世紀に入った。さらば、我等はいま何をすべき乎。新世紀に入った今の日本は、非常時中の非常時である。開闢以来、皇国歴史未曾有の多難多事の歳こそ今年であろう」（1頁）と冒頭で述べつつ「神國の科學的立證」として「聖書を神書として未だ信じ得ずとも、近代科学を唯一の權威として信奉する学徒の前には、次の一事を言明するだけで、実に、皇国日本が天の真理をそのまま地上に賜りし神国であるとの第一印象を深めるであろう」と述べ、「物質は電子より成り、電子は物質に

非ず、「力」である。而して力の奥に生命がある」(23、24頁)という言葉であっている。

佐藤によれば、これが近代科学が立証した宇宙の真理であり、この原理こそ日本古典を一貫する日本精神の最大原理であり、皇国日本が、神国であることの証拠であるとされる。

また、『皇國信仰の根本原理』においては、「靈界の実相を観察し、之を學術化せしめて行くを要する。ここに私は当然「日本信仰学」なるものが生れて来る事を信じている」(97頁)と述べ、さらには「いま迄神がかり状態の外に表現の道を知らず、不合理に見えるものをそのままやむなく信じさせられていた高次元の国体内容を高次元のままその靈界の原理に於いて合理的に科学する心で把握し得るに至る」(98頁)と語っている。佐藤によれば、信仰は断じて非合理や不合理であってはならず、信仰の内容は超論理的ではあるが、合理の事実を「科学する心」ですんなりと受け入れることであるというのだ。ここでいう「科学する心」と

は1940年当時の文部大臣だった橋田邦彦が、盛んに用いていた言葉で「皇国民の道德」と関連させた言葉であった。こうした独特の論理によって皇国とキリスト教と科学が、つなぎ合わされるのである。

通常、キリスト教の信仰と天皇制が、相いれないことはいうまでもないことだが、この時期にそのほとんどが自らの立場を明確に否定することもなく多くのキリスト者は、「天皇制神話」を受容し、それに包摂されていった。佐藤もまたその例外ではなかった。

渡辺一民は「日本のナショナリズムの大きな特徴は、国民の一人一人の思想や信仰にまで立ち入って国家が干渉し、国民が一人の例外もなく特定のひとつの思想や信仰を抱懐するように強制したところにあるわけで、こうした例は、強制収容所で「洗脳」を行ったソビエトの場合を除けば他に例を見出すことはできません⁽¹²⁾」と指摘している。

おわりに

これまで見てきたように大平正芳を

キリスト教に導いたのは、丸沢常哉と密接な関係にあった佐藤定吉だったのである。大平は中国と深い関係を有する政治家だったが、大平に影響を与えることになる佐藤定吉もまた「満州」や中国と深いかわりを持つ科学者だった。

科学史家の岡本拓司は、『近代日本の科学論』の第2章「天皇の国の科学と科学論」において「第1次世界大戦後、議会を中心とする政党政治が定着し、神話に由来する天皇の主権の正統性が形骸化していけば、日本の政治体制も、人智の蓄積を反映した、民主的なものになっていったかもしれない。しかし、実際に生じたのは神話に基づく国体論の再確認という、民族の特異性に依拠する論理への回帰、あるいは憲法や教育勅語の制定時の意図を超えた、その強化であった。この論理が普遍的であり世界的な標準足りうるものであることを示すかのように、満州事変や日中戦争によって、日本の版図は、拡大していった。皇国が日本という地域を超えて広がることが、その国

体論が日本を超えて妥当することの証であるとも理解され、さらに国体論と接合された日本の科学が世界を指導するとも主張されるようになった^⑮と述べている。

ただし、この書では丸沢常哉や佐藤定吉のことは扱われていないが、民衆のための科学という視点を持ちつつも両者とも天皇制国家に包摂され、国体論と接合された日本の科学が世界を指導すると主張するようになっていった。

ただ、佐藤の場合は、キリスト教の信仰がある点が、丸沢と異なっていたが、独自の論理でキリスト教と国体と科学を接合していったのである。

注

- (1) 『佐藤定吉追想録』新教出版社、1970年、297頁。
- (2) 同上、298頁。
- (3) 杉田望『満鉄中央試験所』講談社、1990年、115頁。
- (4) 東北大学臨時理化学研究所について、鎌谷親善「東北大学理科大

- 学臨時理化学研究所―その設立から廃止まで」『化学史研究』化学史学会、23(2)、1996年8月、193-146頁、参照。
- (5) 前掲『佐藤定吉追想録』、303-304頁。
- (6) 渡邊満子『祖父 大平正芳』中央公論新社、2016年、87頁。
- (7) 『私の履歴書 大平正芳』日本経済新聞社、1978年。
- (8) 前掲『佐藤定吉追想録』、345-346頁。
- (9) 丸沢常哉『新中国生活十年の思い出』、1961年、253頁。
- (10) 佐藤定吉「カーキ色素合成並びに其の染色について」『工業化学雑誌』(1912年)において「カーキ」の語源は、インドにて汚穢という意味を有し、太古より染色術を有し、当時その地方の土塊をもって衣服を染めたものにて一般に灰色と褐色の中間色をカーキ色と称せり」と書きだしている。
- (11) 前掲『佐藤定吉追想録』、566頁。

- (12) 渡辺一民『ナショナリズムの両義性―若い友人への手紙』人文書院、1984年、38頁。
 - (13) 岡本拓司『近代日本の科学論―明治維新から敗戦まで』名古屋大学出版会、2021年、37-38頁。
- * 引用文については現代仮名遣い・常用漢字に改めた箇所がある。

筆者略歴(やまぐち・なおき)

1991年、東北大学理学部物理学科卒業、同大学院修了。2003年から北京大学科学与社会研究中心^{センター}に研究留学。2008年に北京日本人学術交流会を組織し、北京で347回開催する。専門は、近代日本植民地科学史、近代日中科学史、現代中国科学技術社会論など。

共著に『在中日本人108人のそれでも私たちが中国に住む理由』(阪急コミュニケーションズ、2013年)、『日中関係は本当に最悪なのか』(日本僑報社、2014年)など。

陶陶俳壇

会 句 陶 陶
結 果
2025年10月

兼題 「胡桃」

馬場由紀子

垣根越え来たりし柿を思案する 瀬崎明良

○由紀子

大きな柿の木が枝を広げ隣家にまで伸びている。隣人は美味しそうな柿を前に探っているのかどうか思案して。どうぞ自由にお探りください、と言ってあげたい。

○紅杓

○正子

運動会平和の森にときの声

○正子

騎馬戦、棒倒しでしょうか？

○紅杓

○由紀子

「平和の森」とはどついつとどついつと、か、気になります。

歌いつつ帰る子ひとり秋夕焼 松島二三四

○正子

○由紀子

よい風景です。どんな歌を、どんな風に歌っているのでしょうか？ 想像が広がります。作者の「自画像」かな、とも思いました。今の子どもはどうでしょうか。昔は、友だちと遊ぶのはもちろん楽しかったけれど、「ひとひ」を楽しむ術を心得ていたように思えます。

○明良

辨護士と表札にあり萩の花

○正子

○由紀子

弁護士をしていらっしまった方の邸なのだろう。もう今は主はいないのかもしいれない。萩だけが往時のまま咲き続けている。

賑わいやパークゴルフに曼珠沙華 日野正子

○二三四

パークゴルフ場に集うのはシニアの皆さんでしょう。群れ咲く曼珠沙華はさしずめギャラリでしょう。賑やかなギャラリーに見守られ、プレイにも熱が入りそうです。

○紅杓

○由紀子

「賑はひ」と「パークゴルフに曼珠沙華」の取り合わせになっているが、「曼珠沙華」と「パークゴルフ」の取り合わせにした方が素直な気がいたします。「曼珠沙華パークゴルフの賑はひ」としては。

遅れ咲く朝顔の青地を這いて

○由紀子

朝顔といえは上に上に伸びるように仕立てるものだが、この朝顔は寄るべなくして地を這い伸びている。「青」の色とその形状が妖のような、また遠い異国の戦で恨みを抱えて死んでいく者たちのような、そんな恐ろしさを感じさせる。

胡桃ニヶ掌で揉み里偲ぶ

○二三四

大内善一

胡桃や、同じような球状の物を掌で転がす健康法がありますね。「掌に二つ握りし鬼胡桃」（明良）の句も同じ景かと思えます。掲句は健康法を実践しつつ、心は故郷へといるものでしょう。胡桃がとれる土地で育たれたのですね。

○正子

○由紀子

老化防止かりハブリか。身体が言つことを聞いていれなくなつて、いっそ郷愁が募る。父が老後胡桃を握って鍛えていました。胡桃の生る里の自然を思い浮かべます。

○明良

格子戸のつづく家並や風の盆

○二三四

古い街並み、しっとりした踊り。懐かしい映画を観ているようです。

○正子

○明良

今や観光地でしか残っていない家並みでしうが吹く風も風情がありますね。

○由紀子

八尾の街並が偲ばれます。

懐かしきかななるみ割人形

上野京

○由紀子

くるみ割り器はありますが、人形になっているのは博物館や骨董店のようなどころでしか見たことありません。日本では珍しいですが、海外ではもっと一般的なのかな。

長月の下旬まで続く猛残暑

○由紀子

硬い表現になってしまったので「身に余る暑さ続きぬ九月尽」としてはいかがでしょう。

神秘的赤銅色の皆既月食

○由紀子

「神秘的」は使わずに仕立てた方がいいと思います。「赤銅に満たされてゆく月の蝕」

からからと脳の軽さよ鬼胡桃

○二三四

馬場由紀子

鬼胡桃を何気なく振つてみた。その音と、わが脳みそを重ねたという発想に、ユーモアとユニークさ、そして一抹のものの悲しさを感じました。人生を重ねた人ならではの句。兼題「胡桃」には思ひのほかたくさん句がありましたが、掲句は味わい深さがひとしおでした。

○紅杓

胡桃の殻を脳と見立てその重さを取り上げているなど非諧味があり、軽妙、ユーモア、機知に富み、洒落的な表現である。さっぱりとした可笑しみを感ずります。そういえば脳味噌を連想します。

○正子

○明良

老いてもまだまだ健在ですよ。日々を大切に生きて鬼のように力強く。

暗がりへ犬の吠えたる夜霧かな

○二三四

夜霧の奥に人には見えないものがあるのを、犬は嗅ぎつけたのかも知れません。「暗がり」と「夜」がかぶっている点は気になりました。

○明良

犬の吠え声と夜霧が不気味さを沸き立たせます。何が潜むのでしょうか、用心。

*旧かな、新かな、作者の意図に任せる。

中国

ウエッチング

編・訳 上松玲子

14歳が推し活に6万元

偉さんはアイドルグループAの応援隊の責任者の一人として、オンラインでAの関連グッズを販売していた。販売価格は明らかに高額で、偉さんはその収益をAのための推し活に使っていた。

童くんは、そのAのファンだった。2022年、14歳になったばかりの童くんは、母親や友人の電話番号でアカウント登録し、偉さんの店舗で数回買い物をして、合計6万人民元以上を使った。これに気が

付いた母親は、童くんが未成年であることを理由に、取引は無効であるとして代金の返還を求め、偉さんに交渉したが解決できず、裁判になった。

裁判所は、童くんは当時14歳で民法上の「制限行為能力者」にあたりと判断し、その消費行為は年齢や判断力に照らして適切でなく、法定代理人である母親の同意もなかったため、契約は民事行為能力の要件を欠き無効だと認定した。

また、被告の偉さんの行為について、表向きはグッズやサービスの提供だが、実質的には推し活に金を使わせる行為であり、契約無効の主な理由となる重大な過失があるとされた。一方、童くんの母親も民法や未成年者保護法に従った適切な監督を行わなかったため、一定の過失があると考えられ、約4万3600元の返還が命じられた。

『人民日報』2025年9月18日

人材を呼び込む新制度

先ごろ、外交部報道官の郭嘉昆氏が発表した「青年科学技術人材ビザ（Kビザ）」は、中国と海外の若手科学技術人材の交流を促進するための新制度で、長期滞在や再入国が可能になり、企業からの招聘状も不要となる。

これには「条件が緩すぎる」「競争が激化する」「移民国家化につながる」といった懸念もあるが、Kビザの対象は国内外の有名大学や研究機関でSTEM分野を専攻・従事する若手人材であり、一定の専門性を備えている。

今後の国際競争の中心は「人材力」にあり、中国は「形にとらわれず、寛容に受け入れる」という伝統理念のもと、開放的な姿勢を貫いている。Kビザはその象徴として、中国が包容力と活力に満

ちた国家を目指す姿勢を世界に示すものである。

『浙江日報』2025年10月9日

人気の草の根サッカー大会

「湘超」即ち湖南省で開かれている地方サッカーリーグが9月の開幕以来、「村超」（貴州省）、「蘇超」（江蘇省）に続き全国的に熱い話題を呼んでいる。人気の理由は、地域ならではの創意工夫と庶民の熱気が融合した独自のスタイルにある。

中でも注目を集めたのが、永州市サッカー協会が考案した「木の上の観戦チケット（掛票）」だ。観客が木に登って試合を観戦するための無料チケットで、1本の木につき3人までで、体重制限や年齢制限まで設けられている。これは、チケット完売後に観客が木に登って試合を見ていたことから生まれたユーモアあふれる発想で、管理の難しさ

を逆手に取った「神対応」として話題になった。

さらに、10月には「お見合いチケット（相親票）」も登場。若者に出会いの場を提供しようという企画で、事前抽選で選ばれた男女がスタジアムの特別席と一緒に観戦できる仕組み。座席にはドリンクやスイーツも用意され、サッカー観戦と恋愛イベントを組み合わせた斬新な試みとして人気を集めている。

湖南はもともエンタメ文化の発信地であり、「湘超」も試合だけでなく、バラエティ番組さながらの演出もある。試合のオープニングには地元民族舞踊やパフォーマンスが取り入れられ、有名司会者が登場することもある。観客も自由に声を上げ、笑いと熱気が絶えない。

選手たちは高校生や大学生、商店主、トラック運転手など地元の一般市民が中心で、ま

さに「みんなのサッカー」。観客は自分の知人や同級生のプレーを応援し、強い親近感と地域の一体感が生まれている。

試合は「スポーツ＋観光＋消費」の効果を生み、開催地では飲食や宿泊の需要が急増。経済効果は1試合で数千万元にのぼるとされる。

「湘超」は、プロサッカーリーグの華やかさとは異なり、庶民が主役の草の根サッカーのお祭りとして地域社会を活性化させている。

〔新民晚报〕2025年10月11日

自動運転は免許符にあらす

報道によれば、深夜の食事で飲酒後、車を運転して帰宅しようとして捕まった男性が、法廷で「自動運転機能を使用していた」と「テクノロ

ジーのお守り」を盾に、罪の軽減を求めたという。北京第二中級人民法院は上訴を棄却し、自動運転が飲酒運転の免

罪符ではないことを、司法原則として力強く示した。

第一に、法律の硬直性は技術的な言い訳で消え去るものではない。飲酒運転の法的評価は、使用した機器ではなく行為そのものに基づく。道路上で酒気帯び運転を行った場合、危険運転罪に該当すると中国の刑法に明記されている。

ここでの核心は「人」の運転行為であり、「車」の自動化レベルではないことだ。今回の裁判で裁判官は現在市販されているL2級の自動運転システムは「運転支援」に過ぎず、運転者が法的に唯一の責任主体であることを的確に指摘した。この判決は法の原則を守るものだ。

次に、運転にあたり法律を遵守することは、すべての運転者に課せられた義務であり、いかなる装備にも優先する。運転支援機能の普及に伴い、「性能があれば無罪」という

誤った安心感が生まれつつある。しかし、交通規則はすべて過去の血の教訓に基づいて作られており、その核心は変わらない。運転者は常時車両を制御下に置き、注意を怠ってはならない。法に従った運転とは、技術支援運転下でも法的義務と制御責任を果たすことを意味する。

さらに、「テクノロジーの善用」は、明確な法的枠組みがあつてこそ実現可能である。技術自体は中立であるが、その運用は法律と倫理の範囲内に制約されるべきだ。

ハンドルは単なる装置ではなく、責任の象徴でもある。交通環境がますます複雑化する今日、飲酒運転など公共の安全を著しく脅かす行為に対して、法律が断固「ゼロ容認」の姿勢を貫くことこそ、社会の安全を守る礎となる。

〔北京青年報〕2025年10月14日



◆令和7年度第7回理事会の議題（10月24日開催）

主な内容は次のとおりである。

監事が会計帳簿と証拠書類を照合精査し、妥当かつ正当と認めた令和7年度中間決算を承認した。また、新年互礼会の出し物、古海建一元会長の『満州国の話』出版、および茨木のり子2025@那覇「それを選んだ」イベントへの協会の協力が承認された。

（事務局長代行 増野亨）

会員だより

◎計報

藤原作弥氏（88歳）
令和7年10月17日逝去
謹んで哀悼の意を表します

同好会だより

○陶陶句会 馬場由紀子先生

12月は10日（水）午後1時からZoomを使用しオンラインで開催。兼題は「冬ざれ」です。

未経験者も大歓迎です。郵送やFAXでの投句もできます。興味のある方はぜひご参加ください。詳細は事務局まで。

○陶謡会 松木千俊先生

メンバー募集中（現在休会中）です。未経験者も大歓迎です。興味のある方は事務局までご連絡ください（一人ずつの個人指導のお稽古もあります）。

○一石会

毎月第2土曜日（12月は13日）午前11時から、7階談話室で開催します。

参加希望者は、開催日前々日（木曜日）までにメールで幹事（瀬崎明 aseken2000@gmail.com）までご連絡ください。初心者にも丁寧に指導します。

みんなの写真館

ミールダルスヨークトル氷河

（表紙）

2025年1月にアイスランドのミールダルスヨークトル氷河で撮ったものです。氷河の面積は約595平方キロに及び、アイスランドで4番目に大きな氷河です。

氷の洞窟は、氷河の内部や縁辺部にできる自然の洞窟で、氷河の融解水や火山活動による熱、外気との温度差など複数の要因が組み合わさって形成されます。冬季は特に美しく、内部は太陽光が水を通して差し込むことで、鮮やかなブルーやターコイズブルーの色合いを見せます。最大の魅力は青い光です。長い年月をかけて氷が圧縮され、氷中の空気が抜けることで氷の純度が高くなり、太陽光の青い波長のみが奥深くまで届くために生まれる現象です。

（姜晋如）

18年前のチベット（表4）

往きは北京空港から林芝空港まで飛行機で。そこからは高山病予防のためとかで、約400キロの行程をバスで少しづつ上ってラサヘ。帰りは列車で西寧まで行き、飛行機で北京に戻りました。

写真でしか見たことのないポタラ宮、手すりも壁もバター（？）でベタベタだったのが記憶に強く残っています。

市場に行ってお土産を買いましたが、なんと、カシミヤのストールが、たしか1枚10元だったと思います。交渉すればもっと安くなるよと耳元でささやかれました。私は東京で待ってる友人たちのために10枚買いました、そばにいた同行の友人は15枚くらい買ったと思います。私はそのうちの1枚を今でも愛用しています。

（塚原美津子）

2025年12月の行事予定

- 4日（木） 14：00 公開 第21回 対面&オンライン講演会
「イノベーションの理論家であり、20世紀最大の経済学者の一人として名高いジョセフ・アロイス・シュンペーターの理論についての解説——日本経済 失われた30年の真因」
中野剛志氏（経済評論家）
- 9日（火） 14：00 謡曲会（松木千俊先生お稽古）
- 10日（水） 13：00 陶陶句会
兼題「冬ざれ」および当季雑詠
- 11日（木） 14：00 公開 第22回 対面&オンライン講演会（東北委員会と共催）
「撫順戦犯管理所、そして中帰連とは」
芹沢昇雄（NPO 法人中帰連平和記念館事務局長・理事）
- 13日（土） 11：00 一石会囲碁例会（於 7階談話室）
- 18日（木） 14：00 公開 23回 対面&オンライン講演会
「支援することの難しさ」
村上一枝氏（カラ＝西アフリカ農村自立協力会代表）
- 19日（金） 15：00 公開21世紀アジア塾（対面のみ）
「年間総括、懇談・懇親会」

*12月27日（土）から1月4日（日）まで事務局はお休みします。

12月の会議予定

2日（火） 15：00	国際交流委員会	17日（水） 14：00	広報委員会
9日（火） 14：00	環境委員会	<u>17日（水） 15：30</u>	東北委員会
12日（金） 14：00	講演委員会	<u>19日（金） 13：00</u>	理事会（第8回）

※下線は通常日程に変更あり。

【1月初めの講演会予定】

- 16日（金） 14：00 公開 第9回21世紀アジア塾講演会
「『中国観察報告』2026年Ⅰ期」
結城隆氏（多摩大学客員教授）

みんなの 写真館

ISSN 0386-0345
二〇二五年（令和七年）十二月一日・毎月一日発行



写真① 往路は林芝空港で降りて
バスでラサへ



写真② 復路はラサから西寧まで
列車で移動



写真③ 車窓から外を眺めれば陽の
光をあびて輝く菜の花畑

「善隣」第五六六号（通巻八三三）

発行所

〒一〇五〇〇〇四 東京都港区新橋一五五
一般社団法人 国際善隣協会
電話 〇三三五七三三〇五（番代表）

INTERNATIONAL GOOD NEIGHBORHOOD ASSOCIATION (IGNA)

<https://www.kokusaizenrin.com>